

学校外の組織化された活動における防犯教育の実践

—ガールスカウト、放課後児童クラブでの地域安全マップ作成活動の効果検証—

大久保 智生 ・ 鈴木 修斗* ・ 木戸 みどり** ・ 岡野 美千代*** ・ 吉田 恵美子****
(心理領域) (北海道大学大学院教育学研究院) (ガールスカウト香川県連盟) (学童クラブゆうか) (香川大学地域・産官学連携戦略室)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*060-0808 札幌市北区西7北11 北海道大学大学院教育学院

**761-2406 丸亀市綾歌町栗熊東3600-5 ガールスカウト香川県連盟

***761-8063 高松市花ノ宮町3-4-28 学童クラブゆうか

****760-8522 高松市幸町1-1 香川大学地域・産官学連携戦略室

Practice of Crime Prevention Education Using Crime Prevention Apps in Organized Activities

Tomoo Okubo, Shuto Suzuki*, Midori Kido**, Michiyo Okano*** and Emiko Yoshida****

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Graduate School of Education, Hokkaido University, Kita 11, Nishi 7, Kita-ku, Sapporo 060-0808*

***Girl Scouts of Kagawa, 3600-5 Kurikumahigashi, Ayauta-cho, Marugame 761-2406*

****Yuka After-School Care, 3-4-28 Hananomiya-cho, Takamatsu 761-8063*

*****Office of Regional Partnership Strategy, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要 旨 本研究の目的は、ガールスカウトと放課後児童クラブという学校外の組織化された活動において、防犯教育として地域安全マップ作成活動を実践し、その効果検証を行うことであった。ガールスカウト参加者21名と放課後児童クラブ参加者18名を対象として、防犯教育の効果について検討を行った。その結果、参加者の防犯に関する能力が向上し、活動が高く評価されていることが示された。

キーワード 防犯教育 地域安全マップ作成活動 組織化された活動 ガールスカウト 放課後児童クラブ

問題と目的

刑法犯認知件数はピーク時に比べ、大幅に減少しているが、犯罪被害への不安は依然として高いことが指摘されている(竹村, 2018)。特に、女性や子どもは犯罪の被害者となりやすいことから、女性や子ども向けの犯罪被害の未然防止を狙いとした防犯教育の拡充が求められている。その際、従来の学校での防犯教育の実施だけでなく、学校外の活動での防犯教育の実施の可能性も視野に入れていく必要があるといえる。

犯罪被害の未然防止を狙いとした防犯教育として実施されることが多いのが、小宮(2005)が考案した地域安全マップ作成活動である。この地域安全マップ作

成活動とは、犯罪機会論の防犯環境設計(Jeffery, 1971)と割れ窓理論(Kelling & Coles, 1996)に基づいて、領域性と監視性の観点から「犯罪が起りやすい場所」と「犯罪が起りにくい場所」を地図にかき出すという体験学習である(小宮, 2006)。地域安全マップ作成活動は、犯罪機会論に基づいて犯罪が起りやすい場所(危険箇所)のキーワード「入りやすい、見えにくい」と犯罪が起りにくい場所(安全箇所)のキーワード「入りにくい、見えやすい」を理解する事前学習、参加者が自らの目線で危険箇所を点検するフィールドワーク、各自で見つけた犯罪が起りやすい場所と起りにくい場所を地図であらわすマップ作

成、作成したマップをクラスに報告する発表会から構成されている。地域安全マップ作成活動の教育効果としては、被害防止能力をはじめ、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力といった子どもの防犯に関する能力の向上が期待されている（小宮、2006）。

近年、地域安全マップ作成活動は、教育効果も期待されることから学校現場に積極的に取り入れられてきている。しかし、学校の多忙化などを背景に地域安全マップ作成活動に時間を割くことが難しいという課題も存在する。実際、これまでの地域安全マップ作成活動では前述のように「事前学習→フィールドワーク→マップ作成→発表会」という流れで授業時間を約4コマ分必要としていた。こうした課題を解決するため、大久保他（2019）は地域防犯マップを作成可能な防犯アプリを開発してきた。開発した防犯アプリを活用した地域安全マップ作成活動ではフィールドワーク中に危険箇所と安全箇所の登録をするため、マップ作成を行う時間が短縮され、確認や共有がしやすいという紙媒体にはないメリットがあることが示されている（大久保他、2020）。その一方で、従来の紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動とアプリを用いた地域安全マップ作成活動を比較すると、従来の紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動のほうが教育効果が高いことも示されている（大久保・米谷、2019）。

これまで防犯アプリを活用した地域安全マップ作成活動は地域住民（大久保他、2023）も対象としているが、主に小学生（大久保・米谷、2019）や中学生（大久保他、2023）、大学生（大久保他、2020）を対象として学校の授業時間内に実施することを念頭に入れて構成を考えてきた。しかし、前述のように、女性と子どもが犯罪被害に遭いやすいことを踏まえると、学校での実施だけでなく、学校外での実施も視野に入れていく必要がある。学校外での様々な活動は組織化された活動（Organized Activities）と呼ばれ、組織化された活動が発達に及ぼす影響は海外において近年注目されてきている（Vandell et al., 2015）。学校外の組織化された活動では、多忙な学校とは異なり、地域安全マップ作成活動に時間を割くことが可能である。したがって、本研究では女性の学校外の活動としてガールスカウト、子どもの学校外の活動として放課後児童クラブにおいて、防犯教育として防犯アプリを活用した地域安全マップ作成活動を実践し、その効果検証を行っていく。

従来の紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動の教育効果については、被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力といった防犯に関する能力が向上することが実証されている（濱本・平、2008；平、2007；柴田・山本・藤田、2010）。防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動では、被害防止能力は同様に向上することが明らかになっているが、紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動とは異なり、コミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力についてはあまり向上しないことが示されている（大久保・米谷、2019）。そこで、本研究では、ガールスカウトでの防犯教育では防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動を実践し、比較的時間を割くことができる放課後児童クラブでの防犯教育では紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動を実践し、その教育効果について検証を行っていく。

以上を踏まえ、本研究では、ガールスカウトと放課後児童クラブという学校外の組織化された活動において、防犯教育として地域安全マップ作成活動を実践し、その効果検証を行うことを目的とする。具体的には、まず、研究1では、ガールスカウト参加者を対象として、防犯教育を実践し、活動の効果検証として防犯に関する能力と活動の評価について検討を行う。次に、研究2では、放課後児童クラブ参加者を対象として、防犯教育を実践し、活動の効果検証として防犯に関する能力と活動の評価について検討を行う。

研究1

目的

研究1では、ガールスカウト参加者を対象に防犯教育として防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動を実践し、その効果について検討を行うことを目的とする。

方法

対象者と手続き 2023年1月に地域安全マップ作成活動をガールスカウト参加者21名に対して実施した。活動の所要時間は2時間であった。なお、分析はHAD（清水、2016）を用いて実施した。

地域安全マップ作成活動の実施に際しては、いつでも活動を中断することができること、アンケートの結果はコンピューターによって数量化（匿名化）した上で分析を行い、分析終了後にアンケート用紙は破棄することを事前アンケート実施時に対象者に伝えた。また、個人の情報は厳しく管理され、外部に漏れること

Table 1 ガールスカウト参加者における活動前後の防犯に関する能力の平均値とt検定結果

	活動前	活動後	t値	効果量 (d)
被害防止能力	18.556 (2.281)	21.556 (2.148)	6.364 ***	1.36
コミュニケーション能力	19.111 (2.139)	20.333 (2.275)	2.829 *	0.56
地域への愛着心	19.500 (2.572)	20.222 (2.533)	2.718 *	0.29
非行防止能力	21.722 (1.776)	22.222 (1.353)	1.638	0.32

* $p<.05$ *** $p<.001$

がないように万全の配慮をし、個人名が特定されることがないことも事前アンケート実施時に対象者に伝えた。

地域安全マップ作成活動の流れ 地域安全マップ作成活動の流れとしては、これまでの防犯アプリを用いた実践（大久保他，2019，2023）と同様に「事前学習→フィールドワーク→発表会」という構成とした。事前学習では、防犯とは犯罪を未然に防止することであり、防犯において重要なのは人ではなく場所に注目することであり、さらに危険箇所のキーワード「見えにくい」「入りやすい」と安全箇所のキーワード「見えやすい」「入りにくい」について、イラストを提示しながら説明を行った。なお、犯罪心理学を専門とする大学教員が授業者として、事前学習と発表会を担当した。そして、3，4名でグループを作ってもらい、グループごとに、危険・安全箇所を点検して、防犯アプリ上に登録するフィールドワークを行った。フィールドワーク後の発表会では、グループで登録箇所のデータを確認し、登録箇所とその理由について発表を行ってもらい、犯罪心理学を専門とする大学教員が発表に対してフィードバックを行った。最後に、フィールドワークを行い気づいたことや犯罪被害に遭わないために何ができるのかを考えてもらった。

アンケート調査 アンケート調査では、①防犯に関する能力、②アプリを用いた地域安全マップ作成活動の評価について尋ねた。①は活動前後に尋ね、②は活動後にのみ尋ねた。

①防犯に関する能力：防犯に関する能力は濱本・平（2008）の「被害防止能力」，「コミュニケーション能力」，「地域への愛着心」，「非行防止能力」の4因子からなる防犯に関する能力尺度24項目を使用した。各項目に対して、「ぜんぜんそう思わない」（1点）から「すごくそう思う」（4点）の4件法で回答を求めた。

②アプリを用いた地域安全マップ作成活動の評価：活動の評価は、「楽しかった」，「やりがいがあった」，「またやりたいと思った」，「人とのつながりを感じ

た」，「勉強になった」の5項目を使用した。各項目に対して、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（5点）の5件法で回答を求めた。

結果と考察

ガールスカウト参加者の防犯に関する能力の変化の検討 防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動を行ったガールスカウト参加者の防犯に関する能力の変化について検討するため、地域安全マップ作成活動前後の防犯に関する能力についてt検定を行った（Table 1）。その結果、被害防止能力 ($t(17) = 6.364$, $p < .001$)，コミュニケーション能力 ($t(17) = 2.829$, $p < .05$)，地域への愛着心 ($t(17) = 2.718$, $p < .05$)において、活動後に得点が有意に高くなることが示された。以上の結果から、防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動によってガールスカウト参加者の防犯に関する能力が向上することが明らかとなった。

本研究の結果から、大学生を対象とした大久保他（2020）や中学生を対象とした大久保他（2023）と同様に、防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動後にガールスカウト参加者の防犯に関する能力が向上することが示された。学校での活動だけでなく、ガールスカウトにおいても同様の結果が得られたことから、防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動は防犯に関する能力の向上に効果のある活動といえる。

ガールスカウト参加者の活動の評価の検討 防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動のガールスカウト参加者の評価について検討するため、各項目の平均と標準偏差を算出した（Table 2）。その結果、「楽しかった」で平均が4.667 ($SD = 0.594$)，「やりがいがあった」で平均が4.556 ($SD = 0.705$)，「またやりたいと思った」で平均が4.444 ($SD = 0.705$)，「人とのつながりを感じた」で平均が4.167 ($SD = 0.786$)，「勉強になった」で平均が4.611 ($SD = 0.502$)であった。以上の結果から、防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動は高い評価が得られることが明らかとなった。

これらの結果から、防犯アプリを用いた地域安全

Table 2 ガールスカウト参加者における活動の評価の平均と標準偏差

項目	あてはまる	どちらかという あてはまる	どちらとも いえない	どちらかという あてはまらない	あてはまらない	Mean	SD
楽しかった	13 (72.2%)	4 (22.2%)	1 (5.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4.667	0.594
やりがいがあった	12 (66.7%)	4 (22.2%)	2 (11.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4.556	0.705
またやりたいと思った	10 (55.6%)	6 (33.3%)	2 (11.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4.444	0.705
人とのつながりを感じた	7 (38.9%)	7 (38.9%)	4 (22.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4.167	0.786
勉強になった	11 (61.1%)	7 (38.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4.611	0.502

マップ作成活動の評価は全て平均が4点を超えていることが示された。ガールスカウト参加者にとって、楽しく、やりがいがあり、人とのつながりを感じられるといった動機づけを高め、関係性を知覚でき、新たな学びを得ることができる活動であったことが推測される。

研究2

目的

研究2では、放課後児童クラブ参加者を対象に防犯教育として紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動を実践し、その効果について検討を行うことを目的とする。

方法

対象者と手続き 2023年8月に地域安全マップ作成活動を4～6年生の放課後児童クラブ参加者18名に対して実施した。活動の所要時間は3時間であった。なお、研究1と同様に分析はHAD（清水，2016）を用いて実施した。

地域安全マップ作成活動の実施に際しては、研究1と同様にいつでも活動を中断することができること、アンケートの結果はコンピューターによって数量化（匿名化）した上で分析を行い、分析終了後にアンケート用紙は破棄することを事前アンケート実施時に対象者に伝えた。また、個人情報は厳しく管理され、外部に漏れることがないように万全の配慮をし、個人名が特定されることがないことも事前アンケート実施時に対象者に伝えた。

地域安全マップ作成活動の流れ 地域安全マップ作成活動の流れとしては、これまでの紙媒体を用いた実践（濱本・平，2008；平，2007）と同様に「事前学習→フィールドワーク→マップ作成→発表会」という構成とした。事前学習では、研究1と同様に防犯とは犯罪を未然に防止することであり、防犯において重要なのは人ではなく場所に注目することであり、さらに危険箇所のキーワード「見えにくい」「入りやすい」と

安全箇所のキーワード「見えやすい」「入りにくい」について、イラストを提示しながら説明を行った。なお、防犯サークルの大学生が授業者として、事前学習と発表会を担当した。そして、3、4名でグループを作ってもらい、各グループに1名の防犯サークルの学生がメンターとなる構成とした。そして、グループごとに、危険・安全箇所を点検して、紙媒体に記録するフィールドワークを行った。フィールドワーク後に、グループごとに模造紙を用いて、記録した危険・安全箇所を書き出した地域安全マップを作成してもらった。発表会では、グループで書き出した危険・安全箇所を確認し、危険・安全箇所とその理由について発表を行ってもらい、防犯サークルの学生が発表に対してフィードバックを行った。最後に、フィールドワークを行い気づいたことや犯罪被害に遭わないために何ができるのかを考えてもらった。

アンケート調査 アンケート調査では、研究1と同様に、①防犯に関する能力、②アプリを用いた地域安全マップ作成活動の評価について尋ねた。①は活動前後に尋ね、②は活動後にのみ尋ねた。

①防犯に関する能力：防犯に関する能力は研究1と同様に濱本・平（2008）の「被害防止能力」、「コミュニケーション能力」、「地域への愛着心」、「非行防止能力」の4因子からなる防犯に関する能力尺度24項目を使用した。各項目に対して、「ぜんぜんそう思わない」（1点）から「すごくそう思う」（4点）の4件法で回答を求めた。

②地域安全マップ作成活動の評価：活動の評価は研究1と同時に、「楽しかった」、「やりがいがあった」、「またやりたいと思った」、「人とのつながりを感じた」、「勉強になった」の5項目を使用した。各項目に対して、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（5点）の5件法で回答を求めた。

結果と考察

放課後児童クラブ参加者の防犯に関する能力の変化の検討 紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動を

Table 3 放課後児童クラブ参加者における活動前後の防犯に関する能力の平均値とt検定結果

	活動前	活動後	t値	効果量 (d)
被害防止能力	17.667 (4.576)	21.000 (2.401)	4.043 **	0.92
コミュニケーション能力	16.500 (4.004)	19.000 (2.870)	3.220 **	0.72
地域への愛着心	16.667 (5.314)	19.444 (4.190)	3.224 **	0.58
非行防止能力	19.667 (3.850)	21.278 (3.159)	3.515 **	0.46

** $p<.01$

Table 4 放課後児童クラブ参加者における活動の評価の平均と標準偏差

項目	あてはまる	どちらかという あてはまる	どちらとも いえない	どちらかという あてはまらない	あてはまらない	Mean	SD
楽しかった	14 (77.8%)	4 (22.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4.778	0.428
やりがいがあった	11 (61.1%)	4 (22.2%)	2 (11.1%)	0 (0.0%)	1 (5.6%)	4.333	1.085
またやりたいと思った	8 (44.4%)	6 (33.3%)	3 (16.7%)	1 (5.6%)	0 (0.0%)	4.167	0.924
人とのつながりを感じた	8 (44.4%)	6 (33.3%)	2 (11.1%)	1 (5.6%)	1 (5.6%)	4.056	1.162
勉強になった	14 (77.8%)	2 (11.1%)	2 (11.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4.667	0.686

行った放課後児童クラブ参加者の防犯に関する能力の変化について検討するため、地域安全マップ作成活動前後の防犯に関する能力についてt検定を行った (Table 3)。その結果、被害防止能力 ($t(17) = 4.043$, $p < .01$)、コミュニケーション能力 ($t(17) = 3.220$, $p < .01$)、地域への愛着心 ($t(17) = 3.224$, $p < .01$)、非行防止能力 ($t(17) = 3.515$, $p < .01$) において、活動後に得点が有意に高くなることが示された。以上の結果から、紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動によって放課後児童クラブ参加者の防犯に関する能力が向上することが明らかとなった。

本研究の結果から、先行研究 (濱本・平, 2008; 平, 2007; 大久保・米谷, 2019) と同様に、紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動後に放課後児童クラブ参加者の防犯に関する能力が向上することが示された。研究1とは異なり、非行防止能力においても有意差が認められたことから、紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動は防犯に関する能力の向上により効果のある活動といえる。

放課後児童クラブ参加者の活動の評価の検討 紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動の放課後児童クラブ参加者の評価について検討するため、各項目の平均と標準偏差を算出した (Table 4)。その結果、「楽しかった」で平均が4.778 ($SD = 0.428$)、「やりがいがあった」で平均が4.333 ($SD = 1.085$)、「またやりたいと思った」で平均が4.167 ($SD = 0.924$)、「人とのつながりを感じた」で平均が4.056 ($SD = 1.162$)、「勉強になった」

で平均が4.667 ($SD = 0.686$)であった。以上の結果から、紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動は高い評価が得られることが明らかとなった。

これらの結果から、紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動の評価は全て平均が4点を超えていることが示された。研究1と同様に、放課後児童クラブ参加者にとって、楽しく、やりがいがあり、人とのつながりを感じられるといった動機づけを高め、関係性を知覚でき、新たな学びを得ることができる活動であったことが推測される。

総合考察

本研究では、ガールスカウトと放課後児童クラブという学校外の組織化された活動において、防犯教育として地域安全マップ作成活動を実践し、その効果検証を行うことを目的とした。具体的には、まず、研究1では、ガールスカウト参加者を対象として、防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動を実践し、活動の効果検証として防犯に関する能力と活動の評価について検討を行った。次に、研究2では、放課後児童クラブ参加者を対象として、紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動を実践し、活動の効果検証として防犯に関する能力と活動の評価について検討を行った。その結果、ガールスカウト参加者と放課後児童クラブ参加者ともに防犯に関する能力が向上することが明らかとなった。また、ガールスカウト参加者と放課後児童クラブ参加者ともに活動を評価していることが明らかと

なった。

ガールスカウト参加者と放課後児童クラブ参加者ともに防犯に関する能力の向上が認められたことから、学校外の組織化された活動での防犯教育の効果が示唆された。防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動の検証を行った研究1では、従来の紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動に近い教育効果が得られたことから、防犯アプリを用いた防犯教育の内容の改善(大久保他, 2020)などにより、防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動であっても教育効果が著しく減少することはないことが示されたといえる。また、比較的時間に余裕のある学校外の組織化された活動においても、地域安全マップ作成活動に割く時間が少ない場合は、防犯アプリを用いた活動を行うことで効果的な防犯教育を行えることが示されたといえる。

紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動の検証を行った研究2では、防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動の検証を行った研究1とは異なり、非行防止能力においても有意差がみられた。さらに、紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動は、被害防止能力以外のコミュニケーション能力、地域への愛着心、非行防止能力において効果量も高く、より教育効果があることが示された。このことから、学校外の組織化された活動において、地域安全マップ作成活動に割く時間に余裕がある場合は、紙媒体を用いた活動を行うことでより効果的な防犯教育を行えることが示されたといえる。

また、今回、アプリを用いた地域安全マップ作成活動の評価について検討した結果、ガールスカウト参加者と放課後児童クラブ参加者ともに活動を評価していることから、ガールスカウト参加者と放課後児童クラブ参加者といった学校外の組織化された活動の参加者にとってなじみやすい活動であったことが示唆された。アプリによる活動は大久保・鈴木(2022)が示しているようにニーズがあることから、今後は時間が割ける場合には紙媒体を用いた活動、時間が割けない場合には防犯アプリを用いた活動といったように活動時間に応じて使い分けていくことも可能になるといえる。

今後の課題としては、3点考えられる。1点目は、学校外での組織化された活動の内容や参加者の要因の検討である。これは学校外での組織化された活動の内容とも関係するが、ガールスカウト参加者と放課後児童クラブ参加者では、もともとの関心に差があること

が予測され、防犯に関する能力のベースラインも異なっていた。今後は様々な学校外の組織化された活動において、防犯教育を実践し、その効果について検討を行っていく必要があるといえる。2点目は、紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動と防犯アプリを用いた地域安全マップ作成活動の比較検討である。これまでの研究(大久保・米谷, 2019)と同様に、本研究においても紙媒体を用いた地域安全マップ作成活動のほうが教育効果があることが示されたが、本研究ではガールスカウト参加者と放課後児童クラブ参加者という異なる学校外の活動の参加者を対象としたため、同じ学校外の活動においても同様の結果が得られるのかについて検討を行っていく必要があるといえる。3点目は、事前学習の授業者の要因の検討である。今回、ガールスカウト参加者を対象とした活動では犯罪心理学を専門とする大学教員が授業者として、事前学習と発表会を担当した。一方、放課後児童クラブ参加者を対象とした活動では、防犯サークルの大学生が授業者として、事前学習と発表会を担当した。したがって、ガールスカウトを対象とした活動と放課後児童クラブを対象とした活動の効果の違いは授業者の属性による可能性も考えられる。したがって、授業者の要因についても検討を行っていく必要があるといえる。

参考文献

- 濱本有希・平伸二(2008). 大学生による小学生への地域安全マップ作製指導とその効果測定 福山大学こころの健康相談室紀要, 2, 35-42.
- 平伸二(2007). 地域安全マップの作製とその効果測定 福山大学こころの健康相談室紀要, 1, 35-42.
- Jeffery, C. R. (1971). Crime prevention through environmental design. California: Sage Publications.
- Kelling, G. L. & Coles, C. M. (1996). Fixing broken windows: Restoring order and reducing crime in our communities. New York: Free Press.
- 小宮信夫(2005). 犯罪は「この場所」で起こる 光文社
- 小宮信夫(2006). 地域安全マップ作製マニュアル改訂版: 子どもと地域を犯罪から守るために 東京法令出版
- 大久保智生・米谷雄介(2019). 小学校におけるICTを活用した地域安全マップ作成活動の効果 日本安全教育学会第20回大会発表論文集
- 大久保智生・米谷雄介・西本佳代・吉井匡・皿谷陽子・永森美帆・八重樫理人・田中晶・高地真由・吉見晃裕・森田浩充(2019). 主題C「地域での防犯を考える」における実践と

- 教育効果に関する検証：駐輪場での施錠率向上のための啓発および防犯ウォーキングアプリによる地域安全マップ作成の効果も含めた検討 香川大学教育研究, 16, 109-122.
- 大久保智生・米谷雄介・八重樫理人・高山朝陽・矢部智暉・竹下裕也・永富太一・遠山敬久・田中晶・高島知之・小野坂裕美・吉見晃裕 (2020). 防犯ウォーキングアプリ「歩いてマイマイ」を用いた地域安全マップ作成活動の課題と可能性：大学生を対象とした調査から 香川大学教育学部研究報告, 2, 153-162.
- 大久保智生・鈴木修斗・岸俊行・永富太一 (2023). サテライトセミナー参加者を対象とした防犯教育の実践：防犯アプリを活用した地域安全マップ作成活動の効果検証 香川大学地域共創センター研究報告, 28, 1-8.
- 大久保智生・鈴木修斗・藤田然吏・藤本健太・西本佳代・永富太一・堀江良英・有吉徳洋 (2023). 防犯アプリを活用した地域安全マップ作成活動の改善と効果検証：中学生と大学生を対象とした実践から 香川大学教育実践総合研究, 46, 53-60.
- 柴田由己・山本利和・藤田修 (2010). 「地域安全マップの作製」が児童の犯罪被害防止能力に及ぼす効果 人間・環境学会誌, 13 (2), 1-10.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 竹村登茂子 (2018). 少年犯罪は減り, 社会不安の減らない国「日本」22世紀研究所評論集, J11, 1-8.
- Vandell, D. L., Larson, R. W., Mahoney, J. L., & Watts, T. W. (2015). Children's organized activities. In M. H. Bornstein, T. Leventhal, & R. M. Lerner (Eds.), Handbook of child psychology and developmental science: Ecological settings and processes. John Wiley & Sons, Inc. Pp. 305-344